

呼吸器内科

● スタッフ（平成27年10月1日現在）

診療科長 瀬戸口 靖弘
 医局長 中山 秀章
 病棟医長 笠木 聡
 外来医長 杉山 伸也

医師数 常勤 8名
 非常勤 7名

● 診療科の特徴・特殊性

高齢化の進行とともに呼吸器疾患患者を有する患者が増えてきている。当科は、呼吸器疾患全般について診療を行っているが、大きな特徴は肺癌、間質性肺炎の呼吸器難病、またリンパ脈管腫症など希少難病の患者さんが関東圏でも多い診療科である。今後呼吸器疾患の診療に対するニーズが高まってくることが予想され、診療連携を通じ、かかりつけ医や、地域中核病院と役割分担を図りながら、診療を行っていききたい。

● 診療体制と実績

1) 外来診療体制と実績

当科が対象とする疾患・症状としては、肺癌、COPD、間質性肺炎のほか、肺炎、気管支喘息、呼吸不全、睡眠時無呼吸症候群、抗酸菌症（肺結核は原則、専門施設へ）などの診療を行っている。外来は初診（午前）と再診（午前）の体制を取っており、原則、紹介患者については初診医が対応している。難病等については特殊専門外来、肺癌化学療法外来、末梢気道外来など専門外来ももうけている（月火水木午後）。病状の落ち着いた患者については、紹介医またはかかりつけ医でのフォローを依頼し、難病等、専門的対応の必要な患者を再診医がフォローする体制としている。2015年度の実績は延べ11,904名（疾患ベースで、初診1,600名程度、再診2,700名）で、詳細は患者、症状グラフ参照していただきたい。

2) 入院診療体制と実績

入院患者数は、定床の120-150%前後で推移するようになっている。2015年度の実績は延べ入院患者6,204名（疾患ベース448名）で、肺癌他の悪性疾患で40%程度占めるが、間質性肺炎の入院が20%近く占めるのは、当院の特徴である。その他肺炎10%とつづく。肺癌治療については手術可能症例については呼吸器外科で紹介し、手術不可能な進行性肺癌については生検サンプル採取後病理診断とともにEGFR遺伝子、ALK遺伝子の解析をほぼ同時にすすめ、エビデンスに基づいた適切な抗癌剤治療を行っている。間質性肺炎でも特に予後不良な難病である特発性肺線維症については、軽度増悪の段階でエラスターゼ阻害薬等で治療し活動性の沈静化につとめている。安定期については抗線維化薬の新規治療薬であるピルフェニドン（ピレスパ）、ニンテダニブ（オフェブ）で対処し増悪抑制に努めている。希少難病であるリンパ

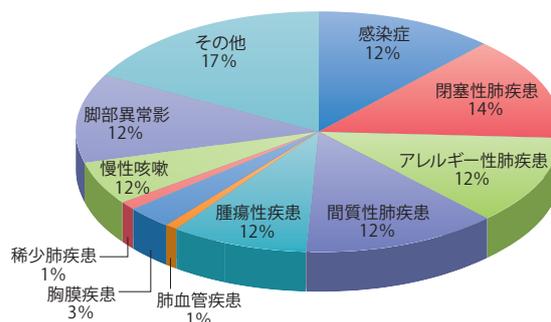
脈管筋腫症についてもmTOR阻害薬であるシロリムス（ラパリムス）による治療も行っている。治療の難しい症例に対応するため、症例検討会を通して、治療方針や病態の検討を定期的に行い、効果的な診断、治療を進めている。

3) 気管支鏡検査と実績

週2回（月・木）午後に定期で実施しており、腫瘍性疾患等では、組織をしっかりと採取するため、検査入院で実施している。2015年度では、120名程度実施している。

外来症例疾患別内訳

2015年度 外来 3,205 症例（延べ外来患者数 11,904 名）



入院症例疾患別内訳

2015年度 入院 448 症例（延べ外入院患者数 6,204 名）

